京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十一卷　第四號

論說

農業社會主義論(一)……法學博士　河田嗣郎
累進課稅の弱點に就きて……法學博士　神戸正雄
支那古來の限田說……文學法學士　小島祐馬
價値論上のリカアドとマルクス(一)……經濟學士　堀經夫
人格主義の立場に於ける經濟と人生の一考察(二・完)……法學士　石川興二

時事問題

排日問題に就きて……法學博士　神戸正雄
我海運政策に對する國民の反省……法學博士　戸田海市

雜錄

三種の「資本論」邦譯……法學博士　河上肇
世界戰爭と人口の變動……法學士　汐見三郎
朝鮮干潟地利用論……經濟學士　三田村一郎
新著紹介……法學士　汐見三郎

人格主義の立場に於ける經濟と人生の一考察（二・完）

石川興二

三　人格主義の立場に於ける經濟と人生

經濟學は久しく富の學問と考へられた。然るにロッシェルは在來の此誤謬を指摘して、其經濟原論の卷頭に「經濟學の出發點も亦到達點も人間である」と叫んだのであつた。

此相反する二つの主張に對するシンテーゼスたる立場を示し、同じく其經濟原論の卷頭に於て「經濟學は一面、富の學問にして、而して他面、而も重要なる他面に於て人間の學問の一部なり」とし、眞に經濟學の正しき立場を明かにせしは、現代斯學界の第一人者マーシャルである。

然し經濟學は既に富と人生との學である、然らば此人生の見解を如何に解するやの定らざる以上、斯學の正しき立場は未だ確定せられぬのである。斯くて我々に科せらる可き次の問題は、此人生を如何に解すべきやと云ふ問題である。

今日までの經濟學の人生觀に最緣深かりしは功利主義であつて、且其誤りなることは余が既に前段に於て明かにせんとした所である。而して經濟學も事實上次第に功利主義の淺薄なるを知つて、理想主義の立場に轉じつゝあるのである。而も尙功利主義の立場を脫し切り得ぬのが現代經

濟學一般の眞狀である。於茲我々に科せられたる眞の問題は、現代の哲學に於て正しとせられ、且古來オーソドックスの思想の中心をなせる理想主義又は人格主義の立場を以て、在來の經濟學の人生觀に全然置き換へるべきことである(註一)

斯くて余は茲に功利主義の立場よりせし考察に對照せしめて、此人格主義の立場より「人生と經濟」との關係及經濟的理想標準を考察し、以て、此試みの幾分をなさんとするのである。而して此爲には「經濟と人生」との關係を「富と人生」の關係と「經濟生活及組織そのものと人生」の關係との兩面より考察しなければならぬことは、前段に於て明にせしところである。依て先づ「富と人生」の關係より論を進むることゝする。

尙ほ茲に重ねて斷つて置かねばならぬことは、本論文の初に於て既に述べしが如く「人生と經濟」との關係と云ふが如きは、斯る一論文の能く爲し得べきところではなく、本論文は寧ろ「人生と經濟」との關係の考へ方を考へんとするものであると云ふことである。

其一　「富と人生」

我々は先づ人格主義の立場の如何なるものなるかを一應考へなければならぬ。理想主義又は人格主義なるものを學問上に於て充分に確立したるものはカントであろう。氏が純粹實踐理性の根本法則と云ふ有名なる命題は卽ち Handle, so dass die Maxim Deines Willens jederzeit zugleich als Princip einer allgemein Gesetzgebung gelten könne (汝の意志の格率が常に同時に普遍的立法の原理として、妥當し得る樣に行爲せよ)と云ふのである。之を云ひ換ふれば所謂カントの斷言命令

に從ふと云ふことであつて、斷言命令とは我々經驗主觀に對して超個人的無制約的無上命令として顯現する絕對命令である。

而して之は自己の快樂を目的とし、物的慾を肆にする快樂說の立場とは全く相反するものである、一の觀樂があつて自分を招いて居る時「あの觀樂が追い度い（Mägeu）」と云ふ意識が起る之がカントの所謂傾向性であり私情的なものである。今之と同時に一人の不幸なる者が自分に救助を求めてゐて、此人を救ふ爲めには此觀樂を捨てねばならぬ、而も「彼の人を助く可きである（Sollen）」と云ふ意識を自分は感ずる、之が斷言命令であつて、それはリッケルトの語を借りて云へば「個人的私情から全く獨立した良心の聲が或行動を價値あるものとして强制する」命令である。此傾向性に從ふ時我々は快樂を感ずることを得るが故に快樂說の立場に於ては善となる、然し理想主義、人格主義の立場に於ては、此傾向性に打ち克ち此絕對命令に從ふた時に善である。

斯る理想主義の立場は總てのオ｣ソトックスの思想に共通なるものであつて、東洋に於ても中庸に「天命之謂性、率性之謂道」と云ひ、論語に「克己復禮」と云ひ、大學に「大學之道、在明德明」と云ふも皆同一の思想であろう。

西田博士は「最も深き自己內面的要求の聲は我々にとつて大なる威力を有し、人生に於て之より嚴なるものはないのである」[1]と云はれ、また「自己の最大なる要求とは意識の根本的統一力、卽ち人格の要求であるから、之を滿足すること卽ち人格の實現と云ふことが我々にとつて絕對善である。」[2]と云うて居らるゝ。而して又人格とは我々の意識の最深き統一力であり、個々の意識を

1) 西田博士、善の研究、一八八頁
2) 同　一九八頁

成立せしむる內面的創造力であり、又實在の根底に於ける無限なる統一力又は內面的創造の最深遠なる發現である、而して我々が人格を現實するとは、此力に合一するの謂であると云ふことを說いて居らるゝ。[3]

以上人格主義の立場の如何なるものなるかを一應明にしたるが故に、次に此立場に於て富なるものを考察しなければならぬ。

先づ富其もの、意義より考へて行かう。斯くの如き立場に於は、富の意義は快樂說の場合と全く異らざるを得ない、卽ち此立場に於ては同じく西田博士の語を用ひて云へば、「人格は凡ての價値の根本であつて、宇宙間に於て只人格のみ絕對價値を以てゐるのである……如何に强大なる要求でも、高尙なる要求でも人格の要求を離れては何等の價値をも有しない、唯人格的要求の一部又は手段としてのみ價値を有するのである、富貴、權力、健康、技能、學識も、それ自身に於て善なのではない、若し人格的要求に反した時には、反つて惡となる。」[4]のである。故に經濟學に於て取扱ふ富なるものも、只人格發展の手段としてのみ價値を有することゝなるのである。卽ち之が人格主義の立場に於ける富の唯一の意義であつて、功利主義の立場に於ける富の意義が、人間に感覺的快樂を與ふるにあるのとは大なる差異である。

然らば次に富の人格發展に致す作用の本質を考へて見やう。人格と云ふは上述せし如きものであつて其は自發自展すべきものである。故に外界の無生物たる富と云ふが如きものは、人格の發展にとつて意義少きもの、如くに思はれる、又事實唯心論者は屢々斯く考へ勝であつたのである。

3)　西田博士、自覺に於ける直觀と反省三五四頁以下及善の研究一九八頁等參照
4)　西田博士、善の研究一九八——一九九頁

然しベルグソンが「生命はそが外界の無生物より受くる抵抗と、生命がそれ自身の中に有する發展力との二つの原因に依るものなり」[5]と云うて居るやうに、今日の哲學及科學に於ては精神の發展は、此二原因に關すると考へらるゝのである。卽ち我々は人格發展の爲めに外部より、人の精神能力に何物かを加ふることは出來ないが、恰も草木の成長に對して成し得ることが、其種子に成長の機會を與へてやることにあると等しく、之が發展の機會を與ふることは出來るのである、education（教育）と云ふことの眞意は educe（引き出す）卽ち人の貴き能力を引き出すことであると云はるゝが我々の成し得ることは只廣き意味に於て、此教育の機會（chance）を與ふることのみであり、またこれが頗る重要なことなのである。經濟學上の富も同樣に此機會を與ふると云ふ點は於てのみ人格の發展に功獻するのである。此點に就きても功利主義の立場に於て富が感覺を滿足せしむることに依り、此立場に於ける善たる快樂の源泉となるとは大いに異るのである。

然らば次に此人格發展の機會としての富の意義を考へて見やう。

我々が眞に人格的要求の現實を完ふせんが爲には、先づ之に必要なる諸種の高き精神的能力の發展を必要とするのである、マーシャルの所謂 those faculities which are source of the highest happiness の發展を要するのである。

然るに、此諸能力の發展は、更に種々なる機會、例へば其人の享る食物衣類住居燃料の充分なること、身體の休息及心の安泰、希望自由變化に富むこと、職業の影響、所謂自由財又は天然財の充分なること、等を要し、また、家庭殊に母の感化、宗教、仲間、學校教育、職業の性質、政

5) Bergson; Crealive evoultion (translated by Arthur Mitchell) p. 103

治及經濟上の組織等に關はるのである。[6]

此等諸條件の中如何なる範圍が經濟學上の富の概念中に入るかは、富の概念を、例へばキャナンの如くに廣義に定めるか、[7]又は狹義に物質的財に限るか、等によつて甚異ることゝなるが、假令富を狹義に考ふるとするも、此等諸種の條件は經濟上の富に關はることが甚大なのである。卽此諸條件の中直接富と云ふべきものは衣食住及燃料であるが、而も一方轉じて考へて見ると、此等諸條件の成立、其ものが經濟上の富に關はつてゐると云ふ上に、更に各人が之等人格發展の機會を得る度合は、殊に今日の如き社會に於ては事實各人の利用し得る富の量に關はることが甚大なのである。例へば各人に對する氣候の影響も、或程度までは經濟上の富の力に依りて左右することが出來。また各人の身體の休息心の安泰も其人の性質と共に又其人の富に關はり。生活の自由希望變化も其人の職業及經濟上政治上の組織の性質等に關はつてゐるが、而も之を利用して事實、自由希望變化を得ることは其人の富に關はつてゐる。職業の影響と云ふも其各人の職業なるものゝ選擇は、父母の富其他其人の利用し得る富に關ることが大なのである。而して自由財なるものも其人の職業及住居等と相關連する點に於て、各人の富の支配を免かれぬ。又各人の受くる家庭生活の良不良は、父母の富の如何に關はること大であり、宗教生活、學校教育と云ふも之を受くる暇と資力とを要する點に於て、各人の富に關はることが大である。卽ち人格發展の條件は、一面富以外の政治經濟上の組織、職業の性質、各人の暇、既成の各人の性格、天然の力自然財に關はるものなるが、而も各人の富に關はることが重大である。

6) Marshall; Principles of Economics. Book IV Chap. V. 及 VI 參照
7) 本誌第十卷第一號及第三號拙稿「キャナンの富の概念に就きて」參照

然し富が人格の發展に對して特に重大なる意義を有するは極貧の狀態に於てゞある卽ちマーシャルは次の如くに云うてゐる。卽ち或人の所得が年一〇〇〇磅なるか五〇〇〇磅なるかと云ふことは、人生の完成に重大なる意義を有せぬが、其が三〇〇磅なるか一五〇磅なるかと云ふことは重大なる意義を有するのである。之貧しき時は至高なる幸福の源泉たる多くの能力を、發展せしむべき機會がないからである、其衣食住に乏しく、又幼より銀貨を得る爲めに教育は早く止められ、長時間工場に苦しく働かねばならぬ、神、朋友に對し又家庭に於ける愛情、其人の天性の美は或場合には多くの物的の富を有する人よりも、立派なる人生を送るを得ることなきにあらざるも、而も貧は絶對の損失である。過勞し、教育されず、疲勞し憂惱し、安靜と暇なく彼等は其最善の能力を用ふる機會なし、貧に普通伴ふ害惡は其必然の結果にあらずと雖も、一般に云うて貧者を滅すものは貧である、而して貧の原因を研究する學問(經濟學)は、大部分人類の墮落の原因の研究であると云ふことを述べてゐる。[8]

扨て以上人格發展の機會に對する富の意義の考察より人格主義の立場に於ける「富と人生」との關係に於ける經濟組織及生活の理想標準を考へることゝなるのである。

而して是には先づ人格主義の立場に於ける根本命題がある、其は社會の總ての人を平等に重んぜねばならぬことである。人格は前述せし如く絶對的の價値であり、自他其價値を差異すべきものではない、卽ちカントの所謂「爾は爾の人格及他人の人格に於て人間の品位を敬し、人格を常に目的として使用し、手段として使用せざれ」である　故に社會の最理想的なる狀態は其社會の

8) Marshall; Principles of economics pp. 3-4.

各員の人格が最大なる統一的發展をなすと云ふことである。

於茲社會各員の人格の最大なる統一的發展を得るが如くに何人にも各自の人格發展に必要なる機會を平等に得せしむるに最適當なる富の狀態を結果すべき經濟生活及組織が理想的のものである。平等とは同等を意味する惡平等ではない、各人の必要とする機會は、各人の人格及其發展の度合の相違に依つて異なる、故に眞の平等とは之に應じたる平等卽ち差別である。

茲に附言すべきは、此人格主義の立場を徹底する時、自ら現代の通弊たる富の量の過重主義及物質過重主義を脫することゝなることである。卽ち先づ人格主義の立場に於ける富の意義は、一に人格の發展を助くるにある、故に其意義は功利主義の立場に於けるが如くに、Want(欲望)を待つてあるにあらずして、activity(活働)を待つてあるのである。人格の發展と云ふも又人格發展に必要なる精神的能力の發展と云ふも、其は要するに人の精神の activity を助くるのである。所謂富なるものは、其質の如何に關はらず總て何等かの Want を滿して人に快樂を與へ、從て快樂に質の差を認めざる功利說の立場では總て意義あるものであるが、人格主義の立場に於ては、假令欲望を滿足し快樂を與ふるも、人格發展を益する性質のものでなければ、其は無意義であり或は有害である。於茲理想的なる經濟組織は、社會各人に最大なる滿足を與ふるところの最大なる富の量を結果するものではなく、社會各員の人格の最大なる統一的發展を期するに、適當なる性質の富を適當なる分量に於て結果するのでなければならぬ。卽ち於茲在來の量過重主義は批判されねばならぬ。

次に富の重要度に就いて、其は功利主義の立場に於ける程過重せらるべきものではない、功利主義の立場に於ては、富は感覺の滿足、快樂と云ふ善の直接の源泉であり、又殆ど唯一の源泉である、故に自ら物質過重の弊に陷る。然るに人格主義の立場に於ては、富は人格發展と云ふ善の間接の機會たるに過ぎず、又唯一の機會にあらずして單に一つの機會たるに過ぎぬのである。於茲在來の物質過重主義は批判されねばならぬ。

其二　「經濟生活及組織そのものと人生」

經濟的理想標準を決せんが爲には、單に「富と人生」との一面的關係のみならず更に「經濟生活及組織そのものと人生」の關係を考察しなければならぬと云ふことは、既に前段に於て力說したところである。而してこのことが人格主義の立場に於て特に重要であると云ふことも既に述べたところに依り略ば明であると思ふが、余は本論文に於て此點を特に重じたいと思ふから、以下先づ此重要なる理由を更に明にしたいと思ふのである。

此爲には我々の日常生活なるものが、我々の人格を形成する上に於て、如何に强き力を有するものなるかを先づ知らなければならぬ。而して現代の大哲ベルグソンの次の語は此點を說くこと頗る剴切なるものがあると思ふ。卽ち、氏は其名著"Creative Evolution"の中に於て曰く「連續とは過去の絕へざる進行であつて、過去は將來の中に浸入して行き、時と共に次第に增大して行く、過去は絕へず成長進步するが故に、又限りなく保存される……勿論之等の過去は我々にとつて極めて漠然たるものではあるが、而も我等は漠然ながらに之等の過去が現在の中に保存されてゐ

ることを認めざるを得ない、我とは、若しくは、我が性格とは、畢竟我が生れし以來生活したる一場の歷史の凝結にあらずして何であるか、否我々は出生以前の両親の氣質をさへ繼承するものなるが故に、寧ろ出生以前よりの歷史の凝結にあらずして何であるか、(What are we, in fact, what is our character, if not the condensation of the history that we have lived from our birth-nay, even before our birth, since we bring with us preternal dispositions) 勿論我々の明かに想ひ浮べ得る所は之等全過去の中の一小部分にしか過ぎない、されど我々が慾望し意慾し生活する場合には我々は生來の心的傾向をも含んだ我々の過去全體の力に動かされるのである。……斯くの如くにして我々の人格は絶へず發生し成長し成熟するのである (Thus our personality shoots, grows and ripens without ceasing)」[9]と、卽或人の人格は其人の送りし生活の凝結である。

然るに人の生活の大部分は、人が生活資料を得る爲の生活である。於茲マーシャルが其大著經濟原論の初に於て述べし次の語は頗る意味深長なるものとなるのである卽ち「人が其生活資料を得る爲の業務なるものは一般に其精神の活動の最も旺盛なる時間を充すものにして、此時に於て人が其才幹を作業の上に用ふる狀態、其作業に關聯して起り來る思想感情、並に作業の同僚、雇主或は自己の使用人との關係、等は其性格爲人を形成するものなり」と(...the business by which a person earns his livelihood generally fills his thoughts during by for the greater part of those hours in which his mind is at its; during them his character is being formed by the way in which he uses his faculties in his work, by the thoughts and the feelings which it suggests, and by his relations to

9) Bergson; Creative evolution(英譯)pp. 4-6.

his assocations in work,his employers or his employees.[10] 卽生活資料を得るが爲の生活は一方人が自己のなす作業そのものに對する關係に於て、他方其人が其仕事を共にする人に對する關係に於て絶へず其人の人格を形成しつゝあるのである。而して此人の一生の大部分、而も人心の最旺盛なる日々の時間を、生活資料を得んが爲めに働くと云ふことは、現に人類大部分の運命であるのみならず又將來に於ても容易に脫れ得ぬ運命である。於茲か經濟生活及組織は其自身大なる人格發展の機會であつて其が直接人生に對して有する意義は愈々重大なる問題となる。

而して經濟生活及組織なるものは富を調達することによつて人格發展の手段たるものである。故に若し其もの自身にして人格の發展に大なる害を及ぼすが如きことあらんか、こは手段の目的に對する矛盾であつて許す可らざることである。且つマーシャルが前揭の語に次ぎて云へる語に意味せるが如く、各人が富を得る方法 (the way in which his income is earned) 卽ち余の所謂經濟生活其ものゝ人生に及ぼす影響の重要さは、之に依り得らるべき富の分量 (the amount of his income) が人格に及ぼす影響の重要さに比して、少からず否其以上のものである。(And very often the influence exerted on a person's character by the amount of his income is hardly less, if it is less, than that exerted by the way in which it is earned.)[11]

斯くして經濟生活及組織の理想的標準を考察するに當り、「富と人生」との關係の外に更に「經濟生活及組織そのものと人生」との關係を考へざることは人格主義の立場に於て愈々重大なることとなるのである。卽ち人格主義に於ては、假令或經濟生活又は組織が如何に人格發展に好都合

10) Marshall; Principles of Economics. pp. 1-2.
11) Ibid. p 2.

なる富の狀態を結果するも、若し其もの自身が人生に及ぼす影響にして好ましからざるときは、そは眞に望ましきものではないのである。

余は以上に於て「經濟生活及組織そのものと人生」との關係の考察の重要なる所以を明かにしたるが故に、次には此關係に於ける經濟の理想標準の何なるやを考察して見やう。

卽ち之を一言にして云へば、人格主義の立場に於ける經濟生活及組織の理想的標準は、單に前述せし如く人格の發展に好適なる富の狀態を結果すると云ふのみならず、更にそれ自身直接に人生に對する關係に於て、人格發展に出來得る限り害少く利益大なるものでなければならぬと云ふことである。

キャナンが、前述せし如くに、[12] 經濟生活其ものゝ直接人生に及ぼす影響を重要視して、經濟的理想は the pain and irksome toil involved in the creation of positive utility or satisfaction の小なるを要するとしたるは、正に快樂を善とする功利主義の立場より此問題を見たるものなるに對し、マーシャルが昨年公にせし "Industry and Trade" に於て與へし、社會問題論上に於ける Real cost of production の概念は其根本に於て略ぼ人格主義の立場よりこの問題を見たるものであると云ふことが出來る。卽ち、其中に grievous and depressing toil, and without adequate education to prepare for the duties of after life. と云ふが如き句は、正にキャナンの pain and irksome toil と云へる語に對照すべきものである。其大著 "Principles of Economics" に於て人格論に筆を起し終始其立場をはなれざるマーシャルが、斯くの如き Real cost の新なる概念を述べるに至りしことは、甚だ當

12) 本誌第十卷六號八〇四——八〇七頁參照
13) Marshall; Industry and Trade. p. 183.

然のことゝは云へ余は、現代英國經濟學界の二大巨壁にこの對照を見ることを頗る興味深く覺えるものである。

茲には理想的なる經濟狀態そのものを論じやうとするのではなく、單に其理想の標準を考察せんとするのであつて、今尙少しく其標準を細別して考へて見ようと思ふ。而して余は曩に人格の發展を計らんが爲には、先づ諸種の機會を與ふることにより人格發展に必要なる人の諸能力を發達せしめ以て始めて人格の發展を完ふし得るものなることを述べたるが、以下述んとする第一のものは經濟生活及組織が此人格發展に必要なる人の諸能力を發達せしむべき諸種の機會に對する關係より考へしものであり、第二はこの諸能力の發達そのものに對する關係より、而して第三は人格の發展そのものに對する關係より考察せしものである。卽ち、第一に、理想的なる經濟生活及組織は出來得る限り人格發展の諸機會を妨ぐること少さものでなければならぬと云ふことである。是れ前述せし如く人格主義の立場に於ては富は專ら人格發展の機會としてのみ意義を有するのであるが、而もそは唯一の機會ではなく、單に一の機會たるに過ぎずして人格の發展には此外に尙多くの事情を必要とする、然るに此等諸事情の多くは、例ば生活が自由希望變化に富めること、又は文化生活教育休息の爲の暇、自然財の享受等は前述せし如く經濟生活及組織の如何に關はること大なるものあるからである。

其第二の理想は、經濟生活の教育生活化と云ふことがある。卽ち經濟生活が人格發展に必要なる諸能力を發展せしむることである。前述せし如く人が人格の發展の爲に外よりなし得ることは

人格及人格發展に必要なる諸能力の發展の機會を與ふると云ふ廣義の教育である。而して經濟生活其ものが此機會として重大なる意義を有することも前述せし所で明かである。

例へば、現代の經濟的自由の制度は自賴心熟慮敢爲の氣風等人の貴き性格を助長した、機械的生産方法も亦其自身の弊を伴ふてゐるものであるが、而もそは人類を心身の疲勞に堪へざる肉體的勞働より救ふことに依つて、先づ人格生活の餘力を與へたるのみならず、更に人類を牛馬に等しき勞働者の地位より高めて、精功高價にして且つ自働的なる機械と云ふ、云はば一種の勞働者の監督者たるの地位に置き、其業務に於て自ら判斷力注意力、責任心と云ふが如き人格發展に重要なる諸能力を用ひしめた、而して用ふる機能が發展し用ひざる機能が衰退すると云ふ進化論の原則は精神の發展に就いても肉體に於けると同樣に行はれ、之等の諸能力は自ら發達することゝなつたのである。[14] 我々は更に進んで現代機械を一層之に適するものに改善し且普及を計る等人の作業そのものに對する關係に留意するのみならず更にまた作業を共にする人々に對する關係を改善する等、産業生活及組織をして、其の種々なる方面より出來得る限り人の高尚なる諸能力を引き出すに適するものたらしめ、以て産業生活を教育生活化さねばならぬ。

今之を功利主義の立場に於けるものと比較することは無益でない、即ち功利主義の立場に於ては常に快樂と云ふことが價値標準であるから、經濟生活及組織其ものゝ人生に及ぼす關係に於ても、其が出來得る限り苦痛を與へること少く、快樂を與ふることの大なるものであると云ふことが唯一の問題となる、從て勞働の遊戯化等と云ふことが主要なる問題となり、機械等も人に直接

14) Marthall Principles of Economics. Book IV Chap. IX 參照

與へる苦痛と云ふことから主として考へられる。

其第三の理想は經濟生活そのものを出來得る限り人格生活化すると云ふことである。卽ち人格生活の條件を調達すべき手段生活たる經濟生活を其儘直に其目的たる人格生活又は人格的要求現實の生活とすることである。而して此が經濟生活そのもの、最高の理想であるとは云ふまでもない。

彼の經濟生活の藝術化と云はるゝものも此一である。こは甚有效なる方法であるが、而も總ての經濟生活に望み得べきものではなく、又そは人類の巨大なる生產力たる機械的生產方法を犧牲とせざる可らざる場合も少くない。

於茲經濟生活を直に人格生活化する爲めに次に考へらるべきことは　經濟生活其ものを道德生活化することにある。凡そ道德的行爲と否とは、行爲の形式に關はるものではなくして其精神にあるのである。卽ち西田博士は曰く「世人は屢々善の本質と其外殼とを混ずるから何か世界的人類的事業でもしなければ最大の善でない樣に思はれてゐる。併し事業の種類は其人の能力と境遇とに由つて定まるもので、誰にも同一のことは出來ない。併し我々は如何に事業は異つて居ても同一の精神を以て働くことは出來る、如何に小なる事業にても常に人類一味の愛より働いてゐる人は、偉大なる人類的人格を現實しつゝある人と云はねばならぬ」[15]と殊に今日の經濟社會に於ては、人々は總て直接には他の人々の必要とする財を生產調達しつゝあるのである。故に若し工場の一職工も、自己の仕事に尙多くの人類の幸福の關る所なることを自覺し、人類に對する愛の心より其日々の仕事にいそしまんか、彼等の日々の業務は其儘にして大なる善行爲となり、彼は其

15) 善の研究二一七頁

儘にて大なる人格の發展をなしつゝあるのである。以上は自己の作業に對する關係に於てゞあるがまた其作業を相共にする人々に對しする關係に於ても愛の心より交りて人生を樂しむを得ば又經濟生活の道德生活化である。かの生産組合の重要意義の一面は斯る機會を與ふることにある、其他我々は種々此機會を工夫せねばならぬ。勿論完全なる經濟生活の道德生活は、高き人格を前提とするものであるから、直に充分に望み得べきものではないが尙ほ其作業を共にする人に對し其日々の生活を社交生活化し、又自己の作業そのものに對する關係に於て單に其業務の報酬を重んぜず、業務其ものを樂しむ藝術的精神より日々の業務をなすと云ふことは、人生の大部分をなす經濟生活が本來の人生々活と隔離することより現代の多くの人々が感じつゝある止み難き二重生活の惱みより、此多くの人々を救ひ出すことであつて、實に人生にとつて甚重大なる意義を有する事柄である。而して假令勞働者に如何に多くの富を與ふるとも、經濟生活が人生生活に對して二重生活をなす以上現代の社會問題も未だ充分なる解決を得ず、人類の眞の幸福は未だ來ないのである。此點のみより見るも「經濟生活其ものと人生との關係」の問題は頗る重要である。

以上の如くにして、余は、先づ「富と人生」との關係に於て、次に「經濟生活及組織そのものと人生」との關係に於て、各々經濟生活及組織の理想的條件を考察したが、此兩面の理想的條件を出來得る限り十分に備へたるものが最も理想的なる經濟生活及組織なのである。

今假りに、前述せしマーシャルの real cost なる語をかりて、或種の經濟生活及組織が其中にある社會各員の人格の統一的發展に與ふる犧牲を表らはし、また real utility なる語を以て其經濟

生活及組織が「富と人生」及「經濟及生活組織其ものと人生」の關係に於て各員の人格の統一的發展に及す利益を表らはし、而してキャナンの功利主義の立場に於ける云ひ表らはし方をかり、以て此意を簡明に云ひあらはせば、卽ち此 real utility nuims real cost なる net utility の最大なる經濟生活及組織が最理想的なるものであると云ふことが出來る。

これ云ふまでもなく、人格主義の只一絕對の價値は人格の發展にあり、而して斯る經濟生活及組織が人格の統一的發展に最大なる功献を致すものなるが故である。

而して經濟生活及組織の改善に關する總ての畫策は此標準より批判されねばならぬ。(終)

(註一) 勿論今日に於ても尙ほ、經濟學は人生觀と全々沒交涉の學問であると云ふ主張もある。然し現に歐洲斯學界のオーソリティたるヂード・マーシャル等の人々は明に此反對の立場に立つてゐる。マーシャルが其經濟原論を人格論に始め、其學說が直接間接に人格主義の立場を示してゐることは前述せしところでも明であろうが、更に明に "the economist……must concern himself with the ultimate aims of man". と云ふ如き語さへ用ゐてゐる。[16] またヂードは其一論文に於て「經濟學は唯物觀を脫する途中にある」と云ひまた「私は經濟學と道德とは寧ろ相離る可らざるものであると云ふ說を唱道する者であるから、此新しき立場より論じて見たい」と述べてゐる。[17] また我國では田島博士が同樣の立場を高張して居られる。[18] 經濟學が營利の學、單に富の學であつた昔日に於てはいざ知らず、人生の爲の學、人間を主とする學となつた今日の經濟學に於ては此が至當なる立場であるまいか。余は此立場をとらんと欲するものである。マダム、スミスがダイヤモンドは交換價値を有するも使用價値を有せずとせしを、ミルが駁せしは價格論の立場に於て正しきことである。[19] これを以て經濟學は總ての點に於て人生觀と沒交涉であるとするものあらばそれは今日の經濟學にとつては至當ではない。斯くて經濟學者も亦人生觀の問題に觸れねばならぬ。

16) Marshall; Principle of Economies. p. 17.
17) 佛蘭西時報、大正九年二月及三月號參照
18) 田島博士著「道德と經濟」
19) Mill; Principles of Political Economy. edited by Ashley. p. 437.